

条件文の時制解釈についての覚え書き

坂口 真理[※]

A Note on the Tense Interpretation of Conditional Sentences

Mari SAKAGUCHI

This paper investigates the interpretation of tense and the time relations between the subordinate clause (i.e. the protasis) and the main clause (i.e. the apodosis) of the conditional sentences. Following Dancygier (1998) and Arita (2006), conditional sentences are classified into three types: predictive conditionals, epistemic conditionals, and counterfactual conditionals. Section 1 discusses morphological properties of modals in the main clause. Section 2 analyzes the tense relations in each of the three types of conditionals. Time sequence relations of epistemic conditionals and counterfactual conditionals are especially interesting. Time sequence in Japanese conditionals can be interpreted differently depending on whether the subordinator - *nara* is used or - *tara* is used, as many researchers have pointed out. Moreover, this paper will show that, in - *nara* conditionals describing simultaneous events, the tense of the subordinate clause is determined by the tense of the main clause proposition.

Key words: conditionals, tense interpretation, modals

0. はじめに

本稿では、条件文における時制の解釈について考察する。特に、前件と後件の時間的順序関係について考える。日本語の4つの条件を表す表現「～と」「～ば」「～たら」「～なら」のうちの「～たら」と「～なら」のみを取り挙げる。条件文については、日本語学や日本語教育の分野で、多くの経験的事実の積み上げがあり、Kuno (1973)をはじめ、南 (1974)、庵 (2001)、角田 (2004)、有田 (2006) など数多くの文献が見られる。また、時制の解釈については、町田 (1989) と三原 (1992) を参考にする。今回は、主に日本語の条件文について分析していく。

条件文の研究については、角田 (2004) を例外として、後件の主節よりも前件の従属節に分析の中心がおかれている印象がある。本稿では、主節の時制が従属節の時制を決定

キーワード：条件文，時制解釈，モーダル表現

※ 本学文学部英語英文学科

する可能性も考慮に入れて分析していく。

第1節では、条件文の主節に現れる modal 表現の形態について考察する。第2節では、条件文における時制の解釈について、2.1. で 予測的条件文, 2.2. で 認識的条件文, 2.3. で 反事実的条件文に分けて、考察していく。

Dancygier (1998) と有田 (2006) に従って、条件文を予測的条件文 (predictive conditionals), 認識的条件文 (epistemic conditionals), 反事実的条件文 (counterfactual conditionals) の3種に分類する。

予測的条件文とは、以下の例文のように、発話時点で条件節の事象が表す命題の真偽がまだ決まっていない文のことである。

- (1) If it rains tomorrow, the game will be canceled.
- (2) (もし) 明日雨が降ったら, 試合は中止になるだろう。

認識的条件文とは、以下の (3) と (4) のように、話し手が前件の命題の真偽を知らず、後件に話し手の認識や判断が表される文である。

- (3) a. If you'll help me, we can finish early.
- b. If Mary is late, she went to the dentist.
- c. If Mary is late, she must have gone to the dentist.
- d. If Mary is late, it means that she went to the dentist.
- (4) (もしも) 花子が使っているなら, よい化粧品に違いない。

角田 (2004 : 13)

反事実的条件文は、(5) と (6) のように、話し手が前件の命題が偽であることをわかっていながら、後件でそこから導かれる推論をする文である。

- (5) a. If you had listened to me, you wouldn't have made so many mistakes.
- b. If I were a bird, I could fly to you.
- (6) a. {もし / もしも} あの時彼が助けていなかったら, 今頃は彼女は死んでいた (だろう)。
- b. {もし / もしも} 翼があったら, 今すぐあのひとのところへ飛んでいくのに。

有田 (2006 : 129) によると、これらの条件文は、『「不確定な知識の状態」に基づく推論の明示的な表現形式』である。これらの条件文は、庵 (2001 : 209 - 213) の5つの条件節の分類のうちの仮定条件と反事実的条件に該当し、「もし / もしも」「万一」などの副詞を挿入できる。本稿では、残りの3種の条件、確定条件や恒常的条件、事実的条件は扱わない。これらは、「もしも」などの副詞が挿入できない条件文である。¹

1. modal 表現の形態と条件文

本節では、認識的条件文と反事実的条件文の主節に現れうる modal 表現の形態を考察する。

英語の助動詞に相当する多くの日本語の modal 表現は、形態上接続できる命題の形式が、次の3種に分けられる。

- 1) 「動詞語幹＋る形」と「動詞語幹＋た形」そして否定形をとることができる。
- 2) 「動詞語幹＋る形」はとることができるが、「動詞語幹＋た形」や否定形はとることができない。
- 3) 「～る」形、「～た」形、否定形をとることができず、動詞語幹に直接接続する。

1) に属する表現には、論理的可能性を表す「～はずだ」(can), 推量を表す「～だろう」(will), 「～に違いない」(must), 「～かもしれない」(may) 等がある。2) に属する表現には、「～べきだ」(should) がある。3) に属する表現には、義務を表す「～なければならない」(must), 不必要性を表す「～なくてもよい」(not have to) 等がある。²

以下に1) に属する表現の接続を示す例文を挙げる。

- (7) a. 太郎は、たぶん [来る] はずだ。
b. 太郎は、たぶん [来ない / 来た] はずだ。
c. 太郎は、たぶん * [来] はずだ。
- (8) a. 太郎は、おそらく [来る] だろう。
b. 太郎は、おそらく [来ない / 来た] だろう。
- (9) a. 太郎は、おそらく [来る] に違いない。
b. 太郎は、おそらく [来ない / 来た] に違いない。
- (10) a. 花子は、ひよっとすると [来る] かもしれない。
b. 花子は、ひよっとすると [来ない / 来た] かもしれない。

「～べきだ」(should) は、2) に属し、庵(2001: 172)も指摘するように、「～る」形はとるが、「～た」形や否定形をとることができない。

- (11) a. 花子は、ぜひ [来る] べきだ。
b. * 花子は、ぜひ [来ない / 来た] べきだ。

以下に3) に属する動詞語幹にしか接続しない表現の例文を挙げる。

- (12) a. 花子は、ぜひ [行か] なければならない。
b. * 花子は、ぜひ [行く / 行かない / 行った] なければならない。
- (13) a. 花子は、[行か] なくてもよい。
b. * 花子は、[行く / 行かない / 行った] なくてもよい。

以上のことを表にまとめると、表1のようになる。

表1 modal 表現が許す命題の形式

	動詞語幹をとる	「～る」形をとる	否定, 「～た」形をとる
「～はずだ」	X	○	○
「～だろう」	X	○	○
「～に違いない」	X	○	○
「～かもしれない」	X	○	○
「～べきだ」	X	○	X
「～なければなら ない」	○	X	X
「～なくてもよい」	○	X	X

3) の形をとる modal 表現は、否定形を含んでいるため、動詞語幹に接続するとも考えられる。

庵 (2001:171-178) によると, modal は主観的な表現なので, 基本的には, 否定にしたり, 疑問文にしたりできない。「～た」形については, どうだろうか。例文で検討してみよう。判断は筆者のものである。「～はずだ」のように, 「～た」形を許すものと「～だろう」のように「～た」形をとらない表現がある。

- (7) 太郎は, おそらく [来る] はずだった。
 (8) *太郎は, おそらく [来る] だろうた。
 (9) ?* 太郎は, [来る] に違いなかった。
 (10) ?* 太郎は, ひよっとすると [来る] かもしれなかった。
 (11) 花子は, [行く] べきだった。
 (12) 花子は, [行か] なければならなかった。
 (13) 次郎は, [行か] なくてもよかった。

日本語にも, 英語の must のような過去形にならない modal 表現と have to のように過去形にできる表現があることがわかる。³ 「～た」形になる表現は, 事実と反する条件文の主節として用いられることができる。

- (7") 太郎は, もし間に合ったなら, [来る] はずだった(のに)。
 (11") 花子は, 機会があれば, そのパーティに [行く] べきだった。
 (12") 花子は, 太郎が行かなかったら, [行か] なければならなかった(だろう)。
 (13") 次郎は, 忙しいなら, [来] なくてもよかった(のに)。

Modal 表現自体を「～た」形にできるか否かを示したのが, 表2である。

表2 modal 表現は「～た」形をとりうるか

	「～た」形をとるか
「～はずだ」	○
「～だろう」	X
「～に違いない」	??X
「～かもしれない」	??X
「～べきだ」	○
「～なければならない」	○
「～なくてもよい」	○

それでは、「～た」形をとらない「～だろう」、「～に違いない」、「～かもしれない」についてはどうだろうか。これらの表現においては命題内に「～た」が使われる時、反事実的条件文と解釈される。

(8") もしもアインシュタインが生きていたら、[会えた/*会える] だろう(に)。

(9") もしもアインシュタインが生きていたら、[会えた/*会える] に違いない。

(10") もしもアインシュタインが生きていたら、[会えた/*会える] かもしれない。

本節では、modal 表現の形態的な特徴を考察し、「～た」形をとった modal 表現は、反事実的条件文の主節として用いられうること、そして、「～た」形にできない modal 表現に関しては、命題内に「～た」をとる文が反事実的条件文の主節として用いられうることを指摘した。

2. 条件文の解釈

条件文 if p, then q の時間的な解釈を考える時、論理的には、次の3つの可能性が考えられる。記号の使い方は、三原 (1992) に従う。

- 1) p で表される事象と q で表される事象が同時に起こる場合。
p = q
- 2) p で表される事象の方が q で表される事象より先に起こる場合。
p < q
- 3) q で表される事象の方が p で表される事象より先に起こる場合。
q < p

そして、p や q の起こる時点と発話時との相対的關係によって、条件文全体の事象が過去、現在、未来のいつ起こったかが決まる。ここでは、p と q の間の時間的順序は省略した。

発話時 < p, q	未来
p, q < 発話時	過去
p, q = 発話時	現在

2.1. 予測的条件文の解釈

予測的条件文においては、発話時点で事象の表す命題の真偽が決まっていない。(1)と(2)の日英語の例文において条件節の内容は、未来の事象を表しているが、動詞の形は、主節の動詞の形とは異なっている。

- (1) a. If it rains tomorrow, the game will be canceled.
 b. *If it will rain tomorrow, the game will be canceled.
 (2) (もし) 明日雨が降ったら、試合は中止になるだろう。

主文においては、日英語とも確実に起こる事象に関してのみ、現在形を用いる。

- (1') a. ? It rains tomorrow.
 b. It will rain tomorrow.
 (2') a. * 明日雨が降った。
 b. ? 明日雨が降る。
 c. 明日雨が降るだろう。

日英語の条件文の従属節は、それ自体の明確な時制が動詞形に示されていないといえる。⁴ (1)と(2)の時制を表しているのは、主節の動詞形である。発話が起こった時点が発話時、主節の事象が起こる時点を主節時、従属節の事象が起こる時点を従属節時とすると、(1)と(2)の時間的順序は、以下のように表される。

- (14) 発話時 < 従属節時 < 主節時

「雨が降る」という事象と「試合が中止になる」という事象とは、未来に起こる事象で、「雨が降る」という事象が起こった後で、主節の事象が起こると解釈した。

本節で述べた予測的条件文の特徴は、主節の事象と従属節の事象が発話時よりも後の未来に起こることだと考えられる。

2.2. 認識的条件文の解釈

認識的条件文においては、話し手が命題の真偽を知らず、後件に反しての認識や判断が表される。

- (15) a. (= 3a) If you'll help me, we can finish early.
 b. あなたが手伝ってくれるなら、早く仕事を終わることができます。

話者の判断や認識を表現するには、「～なら」が一番適している。

Kuno (1973 : 176) によると、「p なら q」は「話し手が p を聞き手(または一般の人々)の主張として完全にそれと同意することなく提示する」としている。つまり、If you assert that p, then (I infer that) q. のように言い換えることができる。(15)に関しては、If you assert that [you help me], then (I infer that) [we can finish early]. とと言える。(15)の命題の部分の時間関係だけを考察すると、発話時<従属節時<主節時と表される。「あなたが手伝う」という事象が成立した後で、「早く仕事が終わる」という事象が成立するという推論である。

次の例文は主節の表す事象と従属節の表す事象の同時性を表す条件文である。

(16) (= 4) (もしも)花子が使っているなら, よい化粧品に違いない。

発話時 = 従属節時 = 主節時

(16)において「花子が使っている」ことは「よい化粧品に違いない」という判断の根拠となっている。(16)は、未来も過去も表さず、発話時点での判断を表している。

「～なら」を使った認識的条件文において、後件を過去形にできないことを Kuno (1973: 170-171) が観察している。

(17)a.* ジョンが来るなら, メアリーが帰りました。

b.* ジョンが来たなら, メアリーが帰りました。

(17)が容認できない理由は、「～なら」条件文の後件の話し手の判断や推論は、主観的な意見であって、過去時制となじまないことを示しているからかもしれない。言い換えると、過去時制の文では、すでに命題の真偽値が確定しており、話し手がその命題の真偽について判断したり、推測したり、主観的な意見を述べる余地が残されていないと考えられる。

(17)において、話し手の判断だということを明示すると以下のような容認できる文になる。

(18)a. もし, [(*明日)ジョンが来る]なら, [メアリーは帰った] (だろう)。

b. もし, [ジョンが来る]なら, [(明日)メアリーは帰る] (だろう)。

c. もし, [(三年前)ジョンが来た]なら, [メアリーは彼を{*許す/ 許した}] (だろう)。

前件と後件が同時性を表す(18)のような「～なら」条件節において、明示的に時制を表す副詞又は副詞句「明日」「三年前」などを入れてみると、条件節の時制は、後件の命題の時制と一致しているのがわかる。(18a)のように、条件節に「明日」を入れると、後件の命題の動詞が「～た」形では容認できない文になる。「明日」を入れるなら後件の命題の動詞は、(18b)のように「～る」形にならなければならない。それに対して、「三年前」という副詞句は、条件節に「～た」形を要求し、後件の命題の動詞にも「～た」形を要求する。このことから、同時性を表す「～なら」条件節の時制は、形態的には「～た」形「～る」形

をともに許すにもかかわらず、主節の時制に依存していると考えられる。

以下の町田(1989)が挙げる同時性を表す「～なら」条件節も、主節に時制を依存していると分析される。

- (19)a. * [(3年前)花子が美しい]なら, 太郎は彼女と結婚した(だろう)。
 b. [花子が美しい]なら, (3年前)太郎は彼女と結婚した(だろう)。
 c. [(昔)花子が美しかった]なら, 太郎は彼女と{*結婚する/結婚した}(だろう) 従属節時<主節時<発話時

Kuno (1973), 三原 (1992: 178-181) によると, 「～たら」をはじめ, 「～と」, 「～ば」は, $p < q$ の時間的順序での事象を表すことができるが, $q < p$ の時間的順序を表すことができない。⁵

- (20)a. 御岳が噴火したら, 大混乱がおこるぞ。
 (発話時<従属節時<主節時)
 b. * 御岳が噴火したら, その前にきっと前兆があるはずだ。
 (* 発話時<主節時<従属節時) (三原 1992)

これに対して, 「～なら」には, このような時間的順序の制約がない。

- (21)a. 御岳が噴火する(の)なら, その後に富士山も噴火する(だろう)。
 (発話時<従属節時<主節時)
 b. 御岳が噴火する(の)なら, その前にきっと前兆がある(はずだ)。
 (発話時<主節時<従属節時) (三原 1992)

英語では, 時間的順序による「～たら」と「～なら」の使い分けに相当する文法的区別はないように思われる。ただし, 有田 (2006) も指摘しているように, ある種の英語の認知的条件文は, 「～なら」で訳すだけでは, 不十分である。

- (22)a. (= 3b) If Mary is late, she went to the dentist.
 b. (= 3c) If Mary is late, she must have gone to the dentist.
 c. (= 3d) If Mary is late, (it means that) she went to the dentist.
 (Dancygier 1998)

この文の時間的順序を考えると, 以下のようになる。

- (23) 主節時<発話時 = 従属節時

(22a) は, 主節の時制と従属節の時制が一致していないように見えるが, 現在の「メアリーが遅れている」という状況の原因として, 主節の「メアリーが歯医者に行った」という過去の事象を話し手は考えている。有田 (2006: 141) も指摘するように, (22a) を (22b) や

(22c) のように書き換えることができる。これを日本語の「～なら」節で表す時、話し手の判断を表す it means that に相当する部分を、日本語では「のだ」で明示的に表さなければならない。

- (22') a. *もし、メアリーが遅れているなら、彼女は歯医者に行った。
 b. もし、メアリーが遅れているなら、彼女は歯医者に行ったんだ。

次の文も、同じような時間的順序をもつ認識的条件文である。

- (24) a. If she is in the lobby, (it means that) the plane arrived early.
 (Dancygier 1998)
 b. *もし、彼女がロビーにいるなら、飛行機が早く着いた。
 c. もし、彼女がロビーにいるなら、飛行機が早く着いたんだ。
 主節時 < 発話時 = 従属節時

本節で時制解釈の際に分析したのは、命題部分の時間的順序であり、条件文全体としては、(18c), (19c), (22) や (24) で、発話時以前に起こった主節の事象は、すべて命題部分は過去形でも話し手の認識を表す modal 表現に含まれているので、真偽値を与えられていない。

本節において、「～たら」には、従属節の事象が起こってから、主節の事象が起こるという時間的順序の制約があるのに対し、「～なら」には、その制約がないと述べた。また、英語では、日本語の「～なら」と「～たら」のような区別はなく、(22a) や (24a) のように、主節の modal の要素を義務的に明示する必要がない条件文があると述べた。同時性を表す「～なら」条件節においては、従属節の時制が主節に依存していると主張した。

2.3. 反事実的条件文

反事実的条件文においては、話し手が前件の命題が偽であることをわかっているながら、後件でそこから推論を導き出す。

次の文は、前件の事象が過去に起こらなかったことがわかっている場合を表している。

- (25) (= 6a) {もし/もしも}あの時彼が助けていなかったら、今頃彼女は死んでいた(だろう)。
 NOT p < 発話時 = NOT q

話し手は「あの時彼が(彼女を)助けていない」ことが偽であることがわかっているながら、現実とは異なる可能性を敢えて考える点が、反事実的条件文の不確定性と言えるのかもしれない。そこから、「今頃彼女が死んでいた」という命題も偽であるという推論が成り立つ。すなわち、「現在彼女がいきている」という命題が真となる。

日本語における認識的条件文と反事実的条件文の違いは、有田(2006)も指摘するように、反事実的条件文の主節の modal 表現の後に「のに」をつけたり、「だろうに」とする

ことで表現できる。

(26)a. 花子が美しかったなら、太郎は結婚しただろうに。

b. 花子が美しかったなら、太郎は結婚したのに。

NOT p \leq NOT q \leq 発話時

反事実的な解釈をするために、何らかの表示が必要である。次の文の場合は、「～たら」と「のに」によって反事実的な解釈が出てくる。

(27)(= 6b) {もし/もしも} (今) 翼があつたら、今すぐあのひとのところへ飛んでいくのに。

発話時 = NOT p \leq NOT q

発話時の今において、「翼がない」ので「飛んでいかない」という解釈になる。

3. まとめと今後の課題

日本語の条件文において、意味と形式の対応が大変自由である印象が強いのだが、認知的条件文の時制解釈を検討すると、規則性があることがわかった。同時性を表す「～なら」条件文において、従属節の時制は主節に依存していると主張した。また、反事実的条件文においても、反事実であることを示す表示があることがわかった。今後は英語との共通点や相違点についても研究していきたい。

注

1. 庵 (2001: 209-213) の挙げる例を示す。

(i) (確定条件)

a. (*もし) 明日になったら、いずれ雨も止むでしょう。

b. (*もし) 10 時になったら、まもなく出発しましょう。

(ii) (恒常的条件)

a. 水は、(*もし) 0℃になったら、凍る。

b. 彼は、(*もし) お金がなくなったら、いつも私の家に来る。

(iii) (事実的条件)

(*もし/*もしも) ここまで来たら、もう大丈夫だ。(speech act conditionals)

これらの条件を表す文は、本稿では扱わない。

2. ここでは、形態上さらに細かく分けられる「～なければならない」、「～に違いない」等の表現も、意味上連続した1つの表現として扱う。

3. 日本語の「～た」形は、過去時制を表すだけでなく、英語の完了形にあたる文脈やさまざまな文脈で使われる。

4. 英語の場合、この現象を時制の後退 (backshift) と捉える研究者もいる。

5. 日本語学習者対象の「～たら」の時間的順序についての調査は、ソルヴァン (2006) を参

照のこと。

参考文献

- 有田節子 (2006) 「時制節性と日英語の条件文」 pp.127-150. 益岡隆志 (編) (2006) 『条件表現の対照』 東京：くろしお出版.
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門：ことばのしくみを考える』 東京：スリーエーネットワーク.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の連節とモダリティ』 東京：くろしお出版.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』 東京：アルク.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 東京：くろしお出版.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京：大修館.
- ソルヴァン・ハリー (2006) 「日本語学習者における条件文習得問題について」 pp.173-193. 益岡隆志 (編) (2006) 『条件表現の対照』 東京：くろしお出版.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and Prediction*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge:The MIT Press.